

# みちのく現代文

## 目次

- 1、はじめに
- 2、問題の部
- 3、答えの部
- 4、おわりに

# 1、はじめに

このカリキュラムは「みちのく現代文」というタイトルの東北大二次試験現代文対策の講座です。ここでの目的は、東北大に合格した受験生のレベルがどのくらいかを提示することです。

さて、現代文という科目は、答えがはっきりしてなくて曖昧な、あるいは、運まかせの科目と考えている人が多いかと思われます。しかし、と言いたいところですが、未だに私も問題に対して絶対的な答えがあるという結論には至っておりません。問題集の現代文の問題を解いて答えをみても、はて、と首をかしげて納得できない、そんなことが多々あります。

しかしながら、東北大学に合格することだけを考えれば、全ての設問に対して絶対的な答えを答える必要はありません。他の人よりも少しばかり優れていればいいのです。それにはまず、最低限の条件として、他の人ができることをできるようにしておくということが求められます。他の人ができるのでから、あなたはその方法を盗むことができます。徹底的に他の人ができることを真似てください。

そして最後の最後に、自分だけの必殺技を用意しましょう。それは英語でも数学でも構いません。他人のやっていないことをやるのです。質的にも量的にも高度なことに挑戦してみましよう。大学の教科書を読んだり、他人より多く勉強したりすることです。

さあ、合格に向けてやるべきことは見えてきたでしょうか。一緒に、当たり前のことを当たり前に行い、最後に必殺技を用意していきましょう。

# 2、問題の部

小説編

次の文章は、太宰治の小説「眉山」<sup>びざん</sup>の一節である。小説家の「僕」は芸術家の仲間をつれ、

「若松屋（眉山軒）」という飲み屋によく来る。そのトシちゃんという女中がいるが、「僕」たちは彼女をその無知と凶々しさと騒がしさに耐えかね、眉毛の形から「眉山」とあだ名をつけ馬鹿にしていた。次は「眉山」が階段の上り下りが乱暴であることや、便所をよごすことについて「僕」たちが話している場面から始まる。よく読んで問いに答えよ。

「聞けば聞くほど、いやになる。あすからもう、河岸をかえましょうよ。いい潮時ですよ。他にどこか、巢を捜しましょう。」

そのような決意をして、よその飲み屋をあちこち覗いて歩いても、結局、また若松屋と

いう事になるのである。何せ、借りが利くので、つい若松屋のほうに、足が向く。

はじめは僕の案内でこの家へ来たらしい頭の禿げた林先生すなわち洋画家の橋田氏なども、その後は、ひとりですべて来てこの家の常連の一人になったし、その他にも、二、三そんな人物が出来た。

あたたくくなって、そろそろ桜の花がひらきはじめ、僕はその日、前進座の若手俳優の中村国男君と、眉山軒で逢って或る用談をすることになっていた。用談というのは、実は彼の縁談なのであるが、少しややこしく、僕の家では、ちよつと声をひそめて相談しなければならぬ事情もあったので、眉山軒で逢って互いに大声で論じ合うべく約束をしていたのである。中村国男君も、その頃はもう、眉山軒の半常連くらいのところになっていた、

そうして眉山は、彼を中村武羅夫氏なかむらむらおだとばかり思い込んでいた。

行ってみると、中村武羅夫先生はまだ来ていなくて、林先生の橋田新一郎氏が土間のテーブルで、ひとりでコップ酒を飲みニヤニヤしていた。

「壮観でしたよ。眉山がミソを踏んづけちゃってね。」

「ミソ？」

僕は、カウンターに片肘をのせて立っているおかみさんの顔を見た。

おかみさんは、いかにも不機嫌そうに眉をひそめ、それから仕方無さそうに笑い出し、「話にも何もなりやしないんですよ、あの子のそそっかしさったら。外からバタバタ眼つきをかえて駆け込んで来て、いきなり、ずぶりですからね。」

「踏んだのか。」

「ええ、きょう配給になったばかりのおミソをお重箱に山もりにして、私も置きどころが悪かったのでしょうけれど、わざわざそれに片足をつつまなくてもいいじゃありませんか。しかも、それをぐいと引き抜いて、爪先立ちになってそのまま便所ですからね。どんなに、こらえ切れなくなっていたって、何もそれほどあわて無くてもよろしいじゃございませんか。お便所にミソの足跡なんか、ついていたひには、お客さまが何と、……」

と言いかけて、さらに大声で笑った。

「お便所にミソは、まずいね。」

と僕は笑いをこらえながら、

「しかし、御不浄へ行く前でよかった。御不浄から出て来た足では、たまらない。何せ眉山の大海と違ってね、有名なものだからね、その足でやられたんじゃ、ミソも変じてクソになるのは確かだ。」

「何だか、知りませんがね、とにかくあのおミソは使い物になりやしませんから、いまトシちゃんに捨てさせました。」

「全部か？　そこが大事なところだ。時々、朝ここで、おみおつけのごちそうになる事があるからな。後学のために、おたずねする。」

「全部ですよ。そんなにお疑いなら、もう、うちではお客さまに、おみおつけは、お出し

致しません。」

「そう願いたいね。トシちゃんね？」

「井戸端で足を洗っています。」

と橋田氏は引き取り、

「とにかく壮烈なものでしたよ。私は見ていたんです。ミソ踏み眉山。吉右衛門きちえもんの当り芸になりそうです。」

「いや、芝居にはなりますまい。おミソの小道具がめんどいです。」

橋田氏は、その日、用事があるとかで、すぐに帰り、僕は二階にあがって、中村先生を待っていた。

ミソ踏み眉山は、お銚子を持ってドスンドスンとやって来た。

「君は、どこか、からだが悪いんじゃないか？ 傍に寄るなよ、けがれるわい。御不浄にばかり行ってるじゃないか。」

「まさか。」

と、たのしそくに笑い、

「私ね、小さい時、トシちゃんはお便所へいちども行った事が無いような顔をしているって、言われたものだわ。」

「貴族なんだそうだからね。……しかし、僕のいつわらざる実感を言えば、君はいつでもたつたいま御不浄から出て来ましたって顔をしているが、……」

「まあ、ひどい。」

でも、やはり笑っている。

「いつか、羽織の裾を背中に背負ったままの姿で、ここへお銚子を持って来た事があったけれども、あんなのは、一目瞭然、というのだ、文学のほうではね。どだい、あんな姿で、お酌するなんて、失敬だよ。」

「あんな事ばかり。」

平然たるものである。

「おい、君、汚いじゃないか。客の前で、爪の垢をほじくり出すなんて。こっちは、これでもお客だぜ。」

「あら、だって、あなたたちも、皆こうしていらっしゃるんでしょ？ 皆さん、爪がきれいだわ。」

「ものが違うんだよ。いったい、君は、風呂へはいるのかね。正直に言ってみろん。」

「それあ、はいりますわよ。」

と、あいまいな返事をして、

「私ね、さつき本屋へ行ったのよ。そうしてこれを買って来たの。あなたのお名前も出ていてよ。」

ふところから、新刊の文芸雑誌を出して、パラパラ頁を繰って、その、僕の名前の出て

いるところを捜している様子である。

「やめろ！」

こらえ切れず、「僕は怒声を発した。」 打ち据えてやりたくらいの憎悪を感じた。

「そんなものを、読むもんじゃない。わかりやしないよ、お前には。何だってまた、そんなものを買って来るんだい。無駄だよ。」

「あら、だって、あなたのお名前が。」

「それじゃ、お前は、僕の名前の出ている本を、全部片っ端から買い集めることが出来るかい。出来やしないだろう。」

へんな論理であったが、僕はムカついて、たまらなかつた。その雑誌は、僕のところにも恵送せられて来ていたのであるが、それには僕の小説を、それこそ、クソミソに非難している論文が載っているのを僕は知っているのだ。それを、眉山がれいの、けろりとした顔をして読む。いや、そんな理由ばかりではなく、眉山ごときに、僕の名前や、作品を、少しでもいじられるのが、いやでいやで、堪え切れなかつた。いや、案外、小説がメシより好き、なんて言っている連中には、こんな眉山級が多いのかも知れない。それに気附かず、作者は、汗水流し、妻子を犠牲にしてまで、そのような読者たちに奉仕しているのはあるまいか、と思えば、泣くにも泣けないほどの残念無念の情が胸にこみ上げて来るのだ。

「とにかく、その雑誌は、ひっこめてくれ。ひっこめないと、ぶん殴るぜ。」

「わるかつたわね。」

と、やっぱりニヤニヤ笑いながら、

「読まなければいいんでしょう？」

「どだい、買うのが馬鹿の証拠だ。」

「あら、私、馬鹿じゃないわよ。子供なのよ。」

「子供？ お前が？ へえ？」

僕は二の句がつげず、しんから、にがり切つた。

それから数日後、僕はお酒の飲みすぎで、突然、からだの調子を悪くして、十日ほど寝込み、どうやら恢復かいふくしたので、また酒を飲み新宿に出かけた。

黄昏の頃だった。僕は新宿の駅前で、肩をたたかれ、振り向くと、れいの林先生の橋田

氏が微醺びくんを帯びて笑って立っている。

「眉山軒ですか？」

「ええ、どうです、一緒に。」

と、僕は橋田氏を誘った。

「いや、私はもう行って来たんです。」

「いいじゃありませんか、もう一回。」

「おからだを、悪くしたとか、……」

「もう大丈夫なんです。まいりましょう。」

「ええ。」

橋田氏は、そのひとらしくも無く、なぜだか、ひどく渋々応じた。

裏通りを選んで歩きながら、僕は、ふいと思いついたみたいな口調でたずねた。

「ミソ踏み眉山は、相変らずですか？」

「いないんです。」

「え？」

「きょう行ってみたら、いないんです。あれは、死にますよ。」

ぎよつとした。

「おかみから、いま聞いて来たんですけどね、」

と橋田氏も、まじめな顔をして、

「あの子は、腎臓結核だったんだそうです。もちろん、おかみにも、また、トシちゃんにも、そんな事とは気づかなかったが、妙にお小用が近いので、おかみがトシちゃんを病院に連れて行って、しらべてもらったらその始末で、しかも、もう両方の腎臓が犯されていて、手術も何もすべて手おくれで、あんまり永い事は無いらしいですね。それで、おかみは、トシちゃんには何も知らせず、静岡の父親のもとにかえしてやったんだそうです。」

「そうですか。……いい子でしたがね。」

思わず、溜息と共にその言葉が出て、僕は狼狽し、自分で自分の口を覆いたいような心地がした。

「いい子でした。」

と、橋田氏は、落ちついてしみじみ言い、

「いまどき、あんないい気性の子は、めったにありませんですよ。私たちのためにも、一生懸命つとめてくれましたからね。私たちが二階に泊って、午前二時でも三時でも眼がさめるとすぐ、下へ行って、トシちゃん、お酒、と言えば、その一ことで、ハイツと返事して、寒いのに、ちっともたいぎがらずにすぐ起きてお酒を持って来てくれましたね、あんな子は、めったにありません。」

涙が出そうになったので、僕は、それを「まかそうとして、

「でも、ミソ踏み眉山なんて、あれは、あなたの命名でしたよ。」

「悪かったと思っているんです。腎臓結核は、おしっこが、ひどく近いものらしいですからね、ミソを踏んだり、階段をころげ落ちるようにして降りてお便所にはいるのも、無理がないんですよ。」

「眉山の大海も？」

「きまっていますよ、」

と橋田氏は、僕の茶化するような質問に立腹したような口調で、

「貴族の立小便なんかじゃありませんよ。少しでも、ほんのちよつとでも永く、私たちの

傍にいたくて、我慢に我慢をしていたせいですよ。階段をのぼる時の、ドスンドスンも、病気でからだが大儀で、それでも、無理して、私たちにつとめてくれていたんです。私たちみんな、ずいぶん世話を焼かせましたからね。」

僕は立ちどまり、地団駄踏みたい思いで、

「ほかへ行きましょう。あそこでは、飲めない。」

「同感です。」

<sup>3</sup>僕たちは、その日から、ふっと河岸をかえた。

## 設問

問1…傍線部1「僕は怒声を発した」のは、なぜか。70字程度で答えよ。

問2…傍線部2において、「僕」はどのような心境か。60字程度で答えよ。

問3…傍線部3のようにしたのは、なぜか。80字程度で答えよ。

〈評論編〉

次の文章を読んであとの問に答えよ

ある婦人が私に言った。私が情痴作家などと言われることは、私が小説の中で作者の理想の女を書きさえすれば忽ち消える妄評だということを。まことに尤もなことだ。昔から傑作の多くは理想の女を書いているものだ。けれども、私が意志することによって、それが書けるか、というと、そうはたやすく行かない。

誰しも理想の女を書きたい。女のみではない、理想の人、すぐれた魂、まことの善意、高貴なAセイシンを表現したいのだ。それはあらゆる作家の切なる希いであるに相違ない。私とてもそうである。

だが、書きだすと、そうは行かなくなってしまう。

誰しも理想というものはある。オフィスだの喫茶店であらゆる人が各々の理想に就て語り合う。理想の人に就て、政治に就て、社会に就て。

我々の言葉はそういふ時には幻術の如きもので、どんな架空なものでも言ひ表すことができるものだ。

ところが、<sup>1</sup>文学は違う。文学の言葉は違う。文学というものには、言葉に対する怖るべき冷酷な審判官がおるので、この審判官を作者といふ。この審判官の鬼の目の前では、幻術はきかない。すべて、空論は拒否せられ、日頃口にする理想が真実血肉こもる信念思想でない限り、原稿紙上に足跡をとどめることを厳しく拒否されてしまうのである。

だから私が理想の人や理想の女を書こうと思って原稿紙に向っても、いざ書きだすと、私はもうさつきまでの私とは違う。私は鬼の審判官と共に言葉をより分け、言葉にこもる真偽を嗅ぎわけておるので、こうして架空な情熱も思想もすべて襟首をつまんで投げやら

れてしまう。

私はいつも理想をめざし、高貴な魂や善良な心を書こうとして出発しながら、今、私が現にあるだけの低俗醜悪な魂や人間を書き上げてしまうことになる。私は小説に於て、私を裏切ることができない。私は善良なるものを意志し希願しつつ醜怪な悪徳を書いてしまふといふことを、他の何人よりも私自身が悲しんでいるのだ。

だから、理想の女を書け、という、この婦人の厚意の言葉も、私がそれを単に意志するのみで成就し得ない文学本来の宿命を見落しておるので、文学は、ともかく、書くことによつて、それを卒業する、一つずつ卒業し、一つずつ捨ててそして、よじ登って行くよりほかに仕方がないものだ。ともかく、作家の手の爪には血が滲んでいるものだ。

男の作家にとっては、理想の男を人間を書くことと同様に、理想の女を書くことが変らざる念願であらう。

然し、日本の文学には、理想の女というものは殆ど書かれていない。要するに、作家の意志が、作家活動というものが、現実に縛られているのだ。人間を未来に求め、人間をそのあらゆる可能性の上で求め、探り、とらえ、そして、かくの如くに表現することによつて実在せしめようとする悲願を持っていないのだ。

いわゆる自然派というヨーロッパ近代文学思想の移入（あやまれる）以来、日本文学はわが人生をふりかえつて、過去の生活をいつわりなく紙上に再現することを文学と信じ、未来のために、人生を、理想を、つくりだすために意欲する文学の正しい宿命を忘れた。

単にわが人生を複写するのは綴方の領域にすぎぬ。そして大の男が綴方に没頭し、面白くもない綴方を、面白くない故に純粹だの、深遠だの、神聖だなどと途方もないことを言っていた。

小説というものは、わが理想を紙上にもとめる業くれで、理想とは、現実にみたまされざるもの、即ち、未来に、人間をあらゆるその可能性の中に探し求め、つかみだしたいという意欲の果であり、個性的な思想に貫かれ、その思想は、常に書き、書きすることによつて、上昇しつつあるものなのである。

けれども、小説は思想そのものではない。思想家が、その思想の解説の方便に小説の形式を用いるといふ便宜的なものではない。即ち、芸術というものは、たしかに絶対なもので、小説の形式によつてしかわが思想を語り得ないといふ先天的な資質を必要とする。

小説は、思想を語るものではあつても、思想そのものではなく、読物だ。即ち、小説というものは、思想する人と、小説する戯作者と二人の合作になるもので、戯作の広さ深さ、戯作性の振幅によつて、思想自体が発育伸展する性質のものである。

明治末期の自然派の文学以来、戯作性というものが通俗なるもの、純粹ならざるものとして、純文学の埒外へ捨て去られた。それは、実際に於ては、むしろ文学精神の退化であることを、彼らは気付かなかつた。

即ち彼等は、戯作性を否定し、小説の面白さを否定することが、実は彼らの思想性の貧困に由来することを知らなかつた。彼等には思想がなかつた。理想がなかつた。人生を未

来に托して、常により高く生きぬこうとする必死な意欲を知らなかった。

思想性が稀薄であるから、戯作性、面白さと、でき合うことができなくて、戯作性といふものによって文学の純粋性が汚されるかのような被害妄想をいだいたわけだが、本当のところは、戯作性との合作に堪えうるだけの逞しい思想性がなかったからに外ならぬ。

小説にとつては、戯作性といふものが必要なもので、それは小説を不純ならしめるどころか、むしろ思想性を伸展させ、育てるものだ。日本には、そういう文学の正統、つまり、ロマンといふものの意欲が欠けていた。つまりは本当の思想が欠けており、より高く生きようとする探求の意欲がなかったから、戯作性との合作に堪えうるだけの思想性がなく、ロマンがなかったのである。

平野謙が私の小説をデフォルメだなどと言うのは大間違いで、私ぐらい正統的な文学は、むしろ、日本には外にない。私のめざしているものは、ロマン、思想家と戯作者の合作品であり、最も正統的な文学だ。

批評家は、作家のめざしているものを見よ。最高の理想をめざして身悶えながら、**B**オジヨクにまみれ、醜怪な現実<sup>B</sup>に足をぬき得ず苦悶悪闘の悲しさに一掬の涙をそそぎ得ぬのか。然り。そそぎ得ぬ筈だ。おん身らは、かかる苦闘を知らないのだから。日本文学の伝統などというものを表面の字づらの上で読みとり、綴り合せて、一文を草することしか知らないのだから。

島崎藤村や夏目漱石がロマンだなどとは大間違いです。彼らは、理想の女を書こうともしていないではないか。理想の女をもとめる魂、はげしい意欲のないロマンなどがあるものか。

永井荷風が戯作者などとは大嘘です。彼は理想の女をもとめてはいない。現実の女を骨董品の如き好色欲をもつて紙上に**モテアソン**でいるだけで、理想の女をもとめるために希願をこめて書きつづけられた作品ではない。まだしも西鶴は八百屋お七を書いてる。

大袈裟に力む必要もない。大文学、大長篇である必要もない。ささやかな短篇で、たとえば、メリメの如く、カルメンからコロンバへ、さらに遂には人を殺すヴィナスの像へ、つつましく、生長しつづけて行く彼の恋人、理想の女を見たまへ。一生涯、たった一人の夢の女を育てつづけ書きつづけたメリメといふ先生も奇妙な先生だが、ともかく、そこには、常に読者の胸を打つ何かももっている筈だ。それを読み得る人が読み得た幸をうるだけの、それ以外の何物でもないただそれだけのものにすぎぬが、所詮文学といふものはただそれだけのものなのである。

私といえども、私なりに、ともかく、理想の女を書きたいのだ。否、理想の人間を、**D**ンカクを書きたいのだ。ただ、それを書こうと希願しながら、いつも、醜怪なものしか書くことができないだけなのだ。

虚しい一つの運動であるか。死に至るまで、徒に虚しい反覆にすぎないのか。書き現したいといふこと、意欲と、そして、書きつづけるといふ運動を、ともかく私は信じているのだ。それが私のものであるといふことを。

設問

(坂口安吾「理想の女」)

- 問1…傍線部1とは、どういうことか、120字程度で答えよ。  
問2…傍線部2とは、どういうことか、80字程度で答えよ。  
問3…傍線部3のように言うのはなぜか、120字程度で答えよ。  
問4…筆者は「理想の女」を書くためにどのような態度を示しているか、全体の論旨を踏まえ、120字程度で答えよ。  
問5…傍線A～Dのカタカナを漢字に直せ。

### 3、 答えの部

小説

答え1…自分の小説をひどく非難している論文がのった文芸雑誌を、文学に素人の眉山が平然と読み、自分の名前や作品をいじることが嫌だったから。(64字)

答え2…馬鹿にしていた眉山が病気だと知り、残念そうに思わず、眉山を良く言った自分が信じられず、失言したと思っている。(54字)

答え3…眉山が腎臓結核であり、先も永くないことを知り、これまで馬鹿にしてきたが、笑顔で一生涯命対応してくれたいじらしい眉山に対し、罪悪を感じ、店にいくのが気まづくなったから。(83字)

評論

答え1…一般の人が使う日常的な言葉が、理想について架空なものを言い表すことと違い、文学は、真偽を判断する冷酷な作者という存在があるため、確たる信念思想でない架空のものは書かれず、意図に反して現実的で低俗醜悪な魂や人間を書くということ。(113字)

答え2…小説は、理想を求める思想の性質と読み物として面白さを求める性質が表裏の結びつきをもっているために、面白みが増すと思想も発展するという読み物だということ。(76字)

答え3…戯作性が通俗、不純なものとして純文学の範囲でないとされたことは、自然派の文学には思想を進展させる戯作性を取り込むだけのたくましい思想がなく、人生を未来に託して、常により高く生き抜こうという理想への必死な意欲がないことになるから。(114字)

答え4…思想を発展させる戯作性を否定せず、人間の可能性を未来に託し、常に高く生きぬこうという理想を書き表したいとする必死な意欲を信じると同時に、書き続けるという反復によってひとつずつ理想に向かい向上していくとする態度を示している。(112字)

答え5…A) 精神 B) 汚辱 C) 弄 D) 人格

## 4、おわりに

以上、「みちのく現代文」はいかがでしたでしょうか。理解できなかったところは、ビデオを何度も見たり、質問システムを利用したりするなどして解決しましょう。また、理解できたところは、その理論が妥当するかどうかを他の問題で試してみましょう。そして、なによりも重要なのは過去問分析です。授業中に提示した見方に従って、自分なりの目安を作っていくみましょう。最後の最後まであがいて、あがいて、合格を勝ち取ってください。杜の都仙台で待っています。